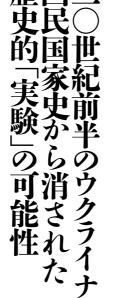
東京大学教授 【選評】





主義と東欧の 20 世紀

の評価である。

ナの運命は、誰にも予測できなかった」 によるウクライナ侵攻に関する描写と (二一頁) など、二〇二二年のロシア 本書には、「キエフ進軍」「ウクライ 見紛うような表現がしばしば出てく エフ進軍」は、一九二〇年五月にポー

クライナについてのものである。「キ る。だが、それらは約一〇〇年前のウ

> も予測できなかった」とは、第一次世 された。「ウクライナの運命は、 キエフを防衛しきれず撤退したが、 界大戦後のウクライナの状況につい 月にはキエフは赤軍によって再び奪還 ライナ連合軍の攻勢を受けて、赤軍 とを指す。そして、ポーランド・ウク 軍が、キエフ(キーウ)を目指してウ ランドとウクライナ人民共和国 クライナの地を東に向けて進軍したこ

失っていたが、分割支配をしていたド 以降、 に崩壊したことで、ポーランドは独立 きた。一八世紀後半のポーランド分割 =ハンガリーが第一次世界大戦を契機 イツ帝国、ロシア帝国、オーストリア クライナ語とロシア語を話すことがで シア統治下のキエフで生まれ育ち、 人のヘンリク・ユゼフスキは、 本書の「主人公」であるポーランド ポーランドは独立国の地位を 帝政

治家として頭角を現したが、彼の活動スキは、ピウスツキの側近の軍人・政後半だったユゼフスキである。ユゼフのが、一八九二年生まれで当時二〇代であったピウスツキにより見出されたを回復した。そして独立回復の立役者

はそれにとどまらなかった。

独立を宣言していたウクライナ人民独立を宣言していたウクライナ人民を指揮した。彼はまた、軍のスパイ活動をきっかけに政治家としのスパイ活動をきっかけに政治家としのスパイ活動をきっかけに政治家としのスパイ活動をきっかけに政治家としず、ポーランド軍事組織(POW)の東方で、ポーランド軍事組織(POW)の東方で、ポーランド軍事組織(POW)の東方で、対ボリシェヴィキ諜報である。他はさらに、一九二〇年、独立を宣言していたウクライナ人民

立国家を持つに値する民族だ」という支配下にあるウクライナの人びとは独ぜフスキとその同志たちは、「ソ連のに成立したソ連に組み込まれるが、ユのは、ウクライナは一九二二年を担った。その後、赤軍によるキエフ

共産主義と民族主義への抵抗

考えを抱き続けた(一三頁)。

ユゼフスキの政治活動で注目に値するのは、ヴォウィン実験とプロメテウるのは、ヴォウィン実験とプロメテウカった。そこには、約一五〇万人のウクライナ系住民(全住民の約七〇%)と約二〇万人のユダヤ系住民が暮らしており、少数のポーランド人が統治しており、少数のポーランド人が統治していた。ユゼフスキは、一九二八年からヴォウィン県知事を務め、ヴォウィン実験に着手した。それは、ヴォウィンに暮らすウクライナ人、ポーランドンに暮らすウクライナ人、ポーランド

を、二〇世紀に復活させることができ ド=リトアニア共和国の統治のあり方 年)が敷いた共和制である。……ユゼ える近代国家は「近代の民族主義思想 多数派のウクライナ系住民に譲歩する めることで彼らの忠誠を得たポーラン 共和国の手本と考えた」(一一〇頁)。 フスキはその気高い共和制を近代的な アニア共和国(一五六九 — 一七九五 う一つは、かつてのポーランド=リト た。一つはヨーロッパの啓蒙主義、も することを目指すものである。著者の ことで、彼らをポーランド国家に統合 人、ユダヤ人の差異を受け入れ、 ユゼフスキは、ユダヤ人に自治権を認 が拒絶した二つの伝統を宿すものだっ スナイダーによれば、ユゼフスキの考

の構成諸共和国から独立国を生み出す反共産主義運動で、ソ連を滅ぼし、そプロメテウス運動は、国境を越えた

ると考えていた。

ポーランドとウクライナをつなぐ役目共和国政府の内務副大臣に抜擢され、

(七五頁)。例えば、パリに拠点を置いてからの利益を守ろうとするモスクワがからの利益を守ろうとするモスクワがからの利益を守ろうとするモスクワが対して、ソ連の各地でくすぶる民族に対して、ソ連の各地でくすぶる民族に対して、ソ連の各地でくすぶる民族に対していた。それは、「ヨーことを目的としていた。それは、「ヨー

国の軍隊も再編されている。 思の事を砕かれて国外に逃れた被抑圧 民族の亡命愛国主義者たち」の一つで 民族の亡命愛国主義者たち」の一つで となるにプロメテウス運動に集 府は、「ワルシャワの錚々たる策士たていたウクライナ人民共和国の亡命政

ためだった」(一二〇頁)。

ユゼフスキは左派の思想を持ってい

党の息の根を、その活動拠点で止めるに送り込んだのは、西ウクライナ共産

ことに加えて、貧しい小作農家が多ウィン実験には、ポーランド人とウクメテウス運動は結び付いていた。ヴォメテウス運動は結び付いていた。ヴォ

通して、彼は、ボリシェヴィズムとは

一九二八年にユゼフスキをヴォウィンフスキの使命だった。ピウスツキが民の間の共産主義思想を排除する目的民の間の共産主義思想を排除する目的

いた (三一頁)。

によって、それまでボリシェヴィキが験に根差していた。特に「キエフ進軍」そして、彼の反共産主義は、現実の経たが、断固とした反共産主義者である。

し、生涯にわたり苦しめたが、それをといく、生涯にわたり苦しめたが、それを打ちのめたが、は、ロシアの政治警察チェーカーにはって多数のPOWの課報員が連行さよって多数のPOWの課報員が連行さよって、それまでボリシェヴィキがによって、それまでボリシェヴィキがによって、それまでボリシェヴィキがによって、それまでボリシェヴィキが

不変の管理体制」であると明確に見抜画性と専門知によって整然と機能する新手の「大規模なテロルであり……計

スゼフスキは、ポーランドが独ソに 分割占領された一九三九年から一三年 ポーランドの共産主義体制の公安警察 に逮捕された。ユゼフスキは終身刑を 言い渡されたものの、ポーランドで限 定的な自由化が進んだ五六年に「医学 定的な自由化が進んだ五六年に「医学 の監視の下で芸術家としての人生を の監視の下で芸術家としての人生を

アウシュヴィッツ史観」の相対化

る。それは、近年の思想史や帝国史研者に促すことではないかと考えられを歴史上の人物について考えるよう読家、国民国家の枠組みから外れる歴史家、国民国家の枠組みから外れる歴史

て考えるということでもある。的な人物や組織の「想像力」につい究などで注目されることが多い、歴史

そうした特長は、スナイダーの他のそうした特長は、スナイダーの他の公一―ハプスブルク家と東欧の二〇世公――ハプスブルク帝国を再興することを夢見たヴィルへルム・フォン・ハプスブルクの生涯が描かれる。「赤い大公」と呼の生涯が描かれる。「赤い大公」と呼がれたヴィルへルムは、ウクライナ独ばれたヴィルへルムは、ウクライナ独がれたヴィルへルムは、ウクライナ独がれたヴィルへルムは、ウクライナ独がれたヴィルへルムは、ウクライナ人として生きる道も選んだ。

ユゼフスキの試みは戦後ポーランドのられた歴史を掘り起こすことでもある。「現在では『ヴォウィン実験』はる。「現在では『ヴォウィン実験』はるか、歴史の影に葬られている」。つまり、本サイダーにとって、ヴォウィン実

られるべきだった」(四頁)。 警察にとって、勝利をおさめたのは新かごに投げ捨てて隠滅したのだ。公安勢にとって、勝利をおさめたのは新かごに投げ捨てて隠滅したのだ。公安り、体制側はそれを「丸ごと歴史の屑共産主義体制には都合の悪いものであ

長くなるが引用する。 批判したのと同様のものである。ややける「アウシュヴィッツ中心史観」を歴史と警告』で、ホロコースト史にお

『ブラックアース――ホロコーストの

こうした問題意識は、スナイダーが、

ている。……同様の理由から、アウとんどは概ね忘れ去られている。第二とんどは概ね忘れ去られている。第二とんどは概ね忘れ去られている。第二とれどは概ね忘れっなものに見せるのシュヴィッツは、なされた悪の実際のシュヴィッツがずっと記憶さ「アウシュヴィッツがずっと記憶さ

る」(下巻、三~五頁)。

寄与しなかったという点で、ホロコー ら除外しうるというわけである。ア こうした経験もまた歴史や記念式典か ヴィッツのみと重ね合わされるなら、 手法は、何万人も参加させる必要が が、実はソ連が直前まで占領していた ば、ドイツによるユダヤ人大量殺戮 ウシュヴィッツは、ソヴィエト市民が た。……仮にホロコーストがアウシュ あったし、何十万人にも目撃されてい るからだ。……東方での大量殺戮の 場所で始まったことを容易に忘れられ トがアウシュヴィッツに収斂するなら 合のよい象徴だった。仮にホロコー 共産主義国家崩壊後のロシアでも、 ストのなかの数少ない部分の一つであ

益であろう。●

、現在の世界を理解するためにも有歴史研究として意義を持つだけでな

シュヴィッツは、戦後のソ連、今日の